はじめに

入試の現代文で問われていることは、**「言語としての日本語」**です。いいかえれば、**「書いてあることを書いてある通りに理解すること」**です。心理テストではありません。自由な作品鑑賞・解釈力でもありません。しかしながら、「書いてあることを書いてある通りに理解すること」は、ふつうに考えられているほど受動的で消極的な行為ではありません。むしろ、テクスト（文脈）以前の先入観や自分勝手な解釈を排して、文脈の中で著者の見解を正しく追うという**能動的で積極的な知的行為**なのです。いいかえれば、現代文には、指導を受けて獲得するべき**「読み方」「方法」**があるということです。

しかも、その「読み方」「方法」は**論説文にも小説・物語文にも共通**したきわめて一貫したものです。それは**「対比の発見と追跡」という方法**です。くわしくは、授業で展開されます。ともあれ、ここで強調したいことは、みなさんが受講しようとしているこの現代文授業は、**「方法の現代文」**だということです。

ノートの取り方

テキストへの**書き込み**が基本です。**赤／青／緑**（黒板では緑ですが、第三の色であれば何色でもＯＫ）の**三色**をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。主役キーワードが赤、敵役キーワードが青、脇役キーワードが緑です。

解法の手順

……**文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……**

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルをみる　→　テーマが判明**することが多い。さらには、「○○と△△」というようにいきなり**対比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくに共通テストの現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわることが多い**）。タイトルの次は「キャスティング＝配役＝誰が出演するのか」に注目。本編の前に「エンドロール」を見てしまう感じです。ただし**選択肢まで読んではダメ**。五択で四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

3　**本文最後の数行をさきに**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。ドラマの最終場面、クライマックスを先に見てしまう感じ。

4　**本文を冒頭から読み**、設問の傍線部にあたるたびに、選択肢を読み、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

記述式問題解答へのガイドライン

１　**字数指定の八割以上**書くことがのぞましい（「五十字以内で説明せよ」という設問なら四十字以上書く）なお、指定字数の半分（五割）に満たない場合は、採点の対象とならないことが多い（つまり０点）

２　記述解答の採点は、**原則的に加点制（ポイント制）**（キーワード・キーフレーズごとに得点を与える。つまり、余分なことを書いたとしても減点はされないのが普通だから、字数の許す限り、重要と思った語句を記入してやる）

３　**誤字・脱字・略字**はそれぞれ１点減点（とくに略字は印象悪いよ！）

４　**「理由はなにか」「なぜか」**などの問いかけに対しては、「〜から。」「〜ので。」「〜ため。」など理由を示す語でしめくくる。そうでないと、１点減点。逆に、理由を求めている設問ではないのに「から」「ので」「ため」でしめくくると減点だよ。

その他解答欄・解答用紙に関する諸注意

a　［　｜人｜間｜は｜…］→　※**「原稿用紙」ではなく「解答欄」**だから最初のマスを空ける必要はない

b　［…｜…｜…｜こ｜と］→　※**句点なし！**（１点減点）
設問文に「句読点も字数にかぞえる」とある場合、文末には必ず句点（。）をつける・句読点をかぞえるという指摘がない場合でも、「説明終わり」の印として句点（。）をつけるのが原則
ただし、「抜き出せ」という設問の場合は、当然本文のまま（余分なものは付けない）

c　［…｜…｜…｜こ｜と。］→　※**句読点は一文字分！**（１点減点）

より本質的な記述問題への解答の仕方〈答案に盛り込むべき要素〉

> ○具体例は原則としてカット。よりまとまった表現を解答に盛り込むべし！
> ○対比の表現（AではなくBである）！
> ○繰り返し、言い換えられている表現は大事。ただし一本化！

抜き出し問題の諸注意

……「語」「語句」「一文」などと表記されているものの範囲について

○「語」＝「一単語」・「ワン＝ワード」・「一品詞」（ただし「一文字」とは限らないからね！）

○「語句」＝複数の単語もありうる。「語」よりも広い概念。「部分」と表記されることもある。

○「一文（文）」＝句点（。）で区切られるまとまり。

（例）

語 ⇐ 心身

語句 ← 心身の一体性

一文・文 ⇒ 心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。

心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。この考察は、「道具」を見直す契機になる。

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り** ……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2 **同一性分断の誤り** ……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け失敗**。**同質性分断**ともいう。

3 **正しい対比喪失の誤り** ……本文中で**「A⟷B」**という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、**「C⟷D」**といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は**「善⟷悪」**という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断** ……本文中の記述がないのに、**「すべての〇〇は」「あらゆる〇〇は」**と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断** ……本文中の記述がないのに、**「〇〇のみ」「〇〇だけ」**と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断** （不当な当為判断）……本文では「〇〇である」「〇〇だ」という事実判断をしているのに、**「〇〇であるべきだ」「〇〇にしなければならない」「〇〇する必要がある」**と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り**……本文中では、**「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り**……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なし**……………文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1〜8・10〜12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り**……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り**……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢。**小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り**……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

予習の仕方

……必ず予習しましょう。映像講義を視聴しているだけでは、解答力は身に付きません。その上で、以下のようなプランが考えられますが、プランCをオススメします。

プランA……映像授業を見る前にまず、自力で解答する
プランB……映像のチャプター１（タイトルと設問条件解説・最終段落先取り読み）まで見てから映像を止めて、解答する
プランC……第三講までプランBで、解法の手順をしっかり学んだ後、第四講からプランA
プランD……現代文があまり得意ではない方は、第四講以降、AとBを交互に繰り返す。例えば、偶数の講義ではプランA、奇数の講義ではプランBというように

予習の時間　＝問題にアタックする演習時間

各講二〇分が基本です（ただし、第一講のみ予習要りません）。その他、以下のようなアレンジも可能です。パターンCがオススメです。

パターンA……右の基本時間通り
パターンB……時間設定にとらわれず、納得いくまで解答する
パターンC……基本時間通りで解答する講と、じっくり納得いくまで解答する講を交互に繰り返す。時間設定を気にするあまり、読み方や解法が雑になっては元も子もありません。かといって悠長に構えすぎてもダメ。本来入試は時間限定付きですから。そこで、じっくり解く回と本番を想定した回を交互に組み合わせましょう。

目標得点……配点はしてありませんから、その講義ごとに、全何題中いくつできたのか、という得点率（例えば第二講なら全部で十五題。十題以上正解なら目標クリア。記述問題は、各「ポイント箇所」を一題と数えましょう）

○私大……………（第二講・九講・十講・十三講・十四講・十五講・十七講・十九講・二十講・二十一講・二十三講）**→六十五％以上**
○記述問題をふくむオリジナル…………（第五講・二十四講）**→六〇％以上**
○共通テスト（マーク式問題に相当）……（第一講その１その２・三講・四講・六講・七講・八講・十一講・十二講・十六講・十八講・二十二講）**→七〇％以上**
○復習問題…………**八〇％以上**

復習の仕方について

予習と授業が柱ですが、復習するなら……

設問をもう一度解き直すというタイプの復習はオススメできません。勉強したような気になるだけで、現代文の場合、発展的な学習とは言えない。文章を読み物として再読することはオススメです。なんたって良質な文章、各テーマのモデルのような文章を集めていますから。ただし、設問については授業内で疑問を解決しましょう。また解説テキストでも確認できます。一方で、現代文入試問題での読解力・解答力を向上させるためには、同じ問題を解き直すのではなく、授業をモデルとして、問題集などで新しい問題に次々チャレンジしていきましょう。スタディサプリでも多くの講座が用意されています（高３用講座だけでなく、高１・２用講座も合わせて活用してください。こちらも実際の良質な入試問題が素材ですから）。その文章・設問も対比で読める・解けるようにする訓練を続けることが有効です。

おすすめの問題集

『マーク式基礎問題集・現代文・改訂版』（河合出版）
『マーク式総合問題集・国語』（河合出版）……「全統マーク模試」を収録したもの
『はじめての共通テスト対策　国語』エデュケーショナルネットワーク編（Ｚ会）……試行調査２回分＋オリジナル２回分から成り、古文や漢文も含みます。マークシートや記述解答用紙も付属。
『Ｚ会・現代文のトレーニング』（増進会出版）……「入門編／必修編／小説編／記述編／私大編」がそれぞれあります。
『ハイスコア！共通テスト攻略　国語　現代文』Ｚ会編集部（Ｚ会）……〈参考書＋問題集〉、〈マーク式＋記述式〉、〈センターの過去問題＋試行試験問題＋オリジナル〉など、それぞれの要素を盛り込んでいます。現代文のみです。
『入試現代文へのアクセス』（河合出版）……「基本編／発展編／完成編」があります。

おすすめの用語解説集

『読み解くための現代文単語』（シグマベスト・文英堂　小柴大輔　編著）

おすすめの参考書

『小柴大輔の一冊読むだけで現代文の読み方&解き方が面白いほど身につく本』（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）

教材選定について

- 有名大学およびセンター試験の過去問の中から良問をセレクト
- 各テーマ（異文化理解論・家族論・認識論・芸術論・哲学論など）の読書資料になる価値の高い文章をセレクト
- それぞれの学問界を代表する筆者の文章をセレクト
- 奇問は外し、入試現代文のモデルとなる設問をセレクト。アタックすることを通じて解答力を高められる設問ばかり。

目次

第一講　入試現代文の導入　その１《評論》……p.11
入試現代文の導入　その２《小説》……p.12
第二講　異文化理解論・文化人類学……p.20
第三講　家族論・ジェンダー論・言語論（前編）……p.26
第四講　家族論・ジェンダー論・言語論（後編）……p.31
第五講　認識論・脳科学……p.36
第六講　《小説その２》母親と子供の対比……p.43
第七講　《小説その３》母親と子供の関係（継母と娘）……p.52
第八講　科学技術史・大学史……p.61
第九講　芸術論・音楽史・音楽社会学……p.69
第十講　日本語論……p.75
第十一講　認識論・哲学論（前編）……p.80
第十二講　認識論・哲学論（後編）……p.86

第一講　入試現代文の導入　その１《評論》

ことばが語と文法からなるというのは、ことばをある切り口で切ったときの一つの事実ではある。しかしそうして切り取ったことばには、一つ、決定的に欠ける点がある。それはことばのもつ対話性を二次的にしか考えられないという点である。ことばはそもそも他者とのかかわりの場で働くもの。ところが〈語―文法〉的なことば観は、しばしば独我論的で、そこに他者とのかかわりが見えてこない。

もちろん、ことばを道具として獲得したのちには、その道具を使って他者と対話することにはなる。しかしそこにおいて、対話はことば獲得の結果であって、それ以上のものではない。言い換えれば、このことば観のなかでは、ことばが獲得されたのち、それによってはじめて他者との対話が可能になるのであって、他者との対話（もちろんことば以前の）からことばが生まれてくるという発想がない。つまりことばそのもののもつ第一次的、本質的な対話性に目を向ける視点が、そこにはすっぽり抜け落ちているのである。Aこのことば観によっては、ことばが私たちの生活世界において働くその様をありのままに見ることはできない。

（浜田寿美男（はまだすみお）『「私」とは何か―ことばと身体の出会い―』による）

問１　傍線部Ａ「このことば観」とあるが、それはどのような「ことば観」か。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

① ことばは他者との対話から生まれ、〈語―文法〉的に運用されているということば観。
② ことばは道具として獲得され、他者との関係の場で機能しているということば観。
③ ことばを生活世界とのかかわりで運用し、対話性への視点を欠落させていることば観。
④ ことばを〈語―文法〉的にとらえ、他者との対話性を模索しようとすることば観。
⑤ ことばを他者との関係の場から切り離し、本質的な対話性を喪失させていることば観。

第一講　入試現代文の導入　その２《小説》

※第一講は「予習なし」で授業のみ聞いて解答していく都合上、文章については**太字**（ゴシック）のところに注目してください。

次の文章は、夏目漱石の小説『道草』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

島田は吝嗇な男であった。妻のお常は島田よりもなお吝嗇であった。

「爪に火を点すってえのは、あの事だね」

彼が実家に帰ってから後、こんな評が時々彼の耳に入った。しかし当時の彼は、お常が長火鉢のそばへすわって、下女に味噌汁をよそってやるのを何の気もなくながめていた。

「それじゃ何ぼ何でも下女がかわいそうだ」

A**彼の実家のものは苦笑した。**

お常はまた飯櫃やお菜のはいっている戸棚に、いつでも錠をおろした。たまに実家の父が訪ねて来ると、きっと蕎麦を取り寄せて食わせた。その時は彼女も健三も同じものを食った。その代わり飯時が来ても決していつものように膳を出さなかった。それを当然のように思っていた健三は、実家へ引き取られてから、間食の上に三度の食事が重なるのを見て、大いに驚いた。

しかし健三に対する夫婦は金の点に掛けてむしろ不思議なくらい寛大であった。外へ出る時は(注)黄八丈の羽織を着せたり、縮緬の着物を買うために、わざわざ(注)越後屋まで引っぱって行ったりした。その越後屋の店へ腰を掛けて、柄を択り分けている間に、夕暮れの時間がせまったので、おおぜいの小僧が広い間口の雨戸を、両側から一度に締め出した時、彼は急に恐ろしくなって、大きな声を揚げて泣き出した事もあった。

彼の望むおもちゃは無論彼の自由になった。その中には(注)写し絵の道具も交じっていた。彼はよく紙を継ぎ合わせた幕の上に、(注)三番叟の影を映して、烏帽子姿に鈴を振らせたり足を動かさせたりして喜んだ。彼は新しい独楽を買ってもらって、時代を着けるために、それを河岸ぎわの泥溝の中に浸けた。ところがその泥溝は薪積み場の柵と柵との間から流れ出して河へ落ち込むので、

彼は独楽の失(な)くなるのが心配さに、日に何べんとなく(注)扱(あつか)い所の土間(じょ)を抜けて行って、何べんとなくそれを取り出して見た。そのたびに彼は石垣の間へ逃げ込む蟹(かに)の穴を棒で突ッついた。それから逃げそこなったものの甲を抑えて、いくつも生け捕りにして袂(たもと)へ入れた。……

要するに彼はこの吝嗇な島田夫婦に、よそからもらい受けた一人っ子として、異数の取り扱いを受けていたのである。

しかし夫婦の心の奥には健三に対する一種の不安が常に潜んでいた。

彼らが長火鉢の前で差し向かいにすわり合う夜寒の宵などには、健三によくこんな質問を掛けた。

「お前のおとっさんはだれだい」

健三は島田の方を向いて彼を指さした。

「じゃお前のおっかさんは」

健三はまたお常の顔を見て彼女を指さした。

これで自分たちの要求を一応満足させると、今度は同じような事をほかの形できいた。

「じゃお前の本当のおとっさんとおっかさんは」

健三はいやいやながら同じ答えを繰り返すよりほかに仕方がなかった。しかしそれがなぜだか彼らを喜ばした。彼らは顔を見合わせて笑った。

ある時はこんな光景がほとんど毎日のように三人の間に起こった。ある時は単にこれだけの問答では済まなかった。ことにお常はしつこかった。

「お前はどこで生まれたの」

こう聞かれるたびに健三は、彼の記憶のうちに見える赤い門——高藪(たかやぶ)でおおわれた小さな赤い門の家(うち)をあげて答えなければならなかった。お常はいつこの質問を掛けても、健三が差しつかえなく同じ返事のできるように、彼を仕込んだのである。彼の返事は無論器械的であった。けれども彼女はそんな事には一向頓着(とんじゃく)しなかった。

「健坊、お前本当はだれの子なの、隠さずにそうおいい」

彼は苦しめられるような心持ちがした。時には苦しいより腹が立った。向こうの聞きたがる返事を与えずに、わざと黙っていたくなっ

た。

「お前だれが一番好きだい。おとっさん？　おっかさん？」

健三は彼女の意を迎えるために、向こうの望むような返事をするのがいやでたまらなかった。彼は無言のまま棒のように立っていた。それをただ年歯の行かないためとのみ解釈したお常の観察は、むしろ簡単に過ぎた。**彼は心のうちで彼女のこうした態度を忌み悪(にく)んだのである。**

夫婦は全力を尽くして健三を彼らの専有物にしようとつとめた。また事実上健三は彼らの専有物に相違なかった。従って彼らから大事にされるのは、つまり彼らのために彼の自由を奪われるのと同じ結果に陥った。B彼にはすでに身体(からだ)の束縛があった。しかしそれよりもなお恐ろしい心の束縛が、何もわからない彼の胸に、ぼんやりした不満足の影を投げた。

夫婦は何かに付けて彼らの恩恵を健三に意識させようとした。それである時は「おとっさんが」という声を大きくした。ある時はまた「おっかさんが」という言葉に力を入れた。おとっさんとおっかさんを離れたただの菓子を食ったり、ただの着物を着たりする事は、自然健三には禁じられていた。

自分たちの親切を、無理にも子供の胸に外部からたたき込もうとする彼らの努力は、かえって反対の結果をその子供の上に引き起こした。健三はうるさがった。

「なんでそんなに世話を焼くのだろう」

「おとっさんが」とか「おっかさんが」とかが出るたびに、健三はおのれひとりの自由をほしがった。自分の買ってもらうおもちゃを喜んだり、(注)錦絵(にしきえ)を飽かずながめたりする彼は、かえってそれらを買ってくれる人をうれしがらなくなった。少なくとも両(ふた)つのものをきれいに切り離して、純粋な楽しみにふけりたかった。

夫婦は健三をかわいがっていた。けれどもその愛情のうちには変な報酬が予期されていた。金の力で美しい女を囲っている人が、その女の好きなものを、いうがままに買ってくれるのと同じように、彼らは自分たちの愛情そのものの発現を目的として行動する事ができずに、ただ健三の歓心を得るために親切を見せなければならなかった。そうしてC彼らは自然のために彼らの不純を罰せられた。しかも自ら知らなかった。

(注)　〇黄八丈――黄色の地に鳶(とび)・茶などの縞(しま)を織り出した絹織物。八丈島が本産地。

○越後屋――東京日本橋にあった大呉服店。
○写し絵――光線によって、ガラスに描いた絵などを幕に映し出すもの。幻灯。
○三番叟――歌舞伎の舞の役。ここでは、それを模した人形のおもちゃ。
○扱い所――今の区役所または町役場などに当たるもの。
○錦絵――江戸時代に創始された華麗な多色刷浮世絵版画。

問１　傍線部Ａ「彼の実家のものは苦笑した。」とあるが、なぜ苦笑したのか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。
①　お常が、実家のものの前で、これ見よがしに下女に味噌汁をよそっていたから。
②　主人の妻から味噌汁をよそってもらっている下女が、いかにも恐縮していたから。
③　主人から冷遇されている下女に対して、健三がほとんど無関心な態度を示したから。
④　お常が、主人の妻という身分でありながら、健三の前で下女に味噌汁をよそったから。
⑤　お常が、下女に手ずから味噌汁をよそってやったのは、その量を惜しんでのことだから。

問２　傍線部Ｂ「彼にはすでに身体の束縛があった。……ぼんやりした不満足の影を投げた。」とあるが、ここで「身体の束縛」「心の束縛」とはどのようなことをさすか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。
（選択肢カット）

問３　傍線部Ｃ「彼らは自然のために彼らの不純を罰せられた。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。
①　島田夫婦が健三を愛するのは、義理の親とはいえ当然のことであったが、甘やかしすぎたために、結果として健三のわがままを増長させてしまったのである。

②　健三には小さな赤い門のある家の懐かしい思い出があって、島田夫婦の心からの愛情もただ煩わしいものとして、かえって彼らに無言の反抗をしたのである。

③　島田夫婦は健三が本当の子ではなかったので、愛情を表現するのにもいつも押しつけがましいものがあって、結果として彼の離反を招くことになったのである。

④　健三は島田夫婦にとって、義理の子とはいえ、たった一人の子であったために、まるで自分たちの専有物のように取り扱って、逆に自縄自縛に陥ったのである。

⑤　島田夫婦には実子がなく、子供を育てた経験が十分ではなかったので、健三の扱いに慎重になりすぎて、たえず不安にかられざるをえなかったのである。

第一講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●その１の筆者　浜田寿美男＝はまだ　すみお（一九四七〜）香川県生まれ、京都大学大学院で心理学を専攻。発達心理学者

●その２の筆者　夏目漱石＝なつめ　そうせき（一八六七〜一九一六）東京生まれ、東京帝国大学英文科卒。いわずと知れた大文豪。東大講師を辞め（当時事件だった）、朝日新聞専属小説家へ。小説家としての処女作『吾輩は猫である』、遺作『明暗』

語句

独我論＝どくがろん↓実在するのは自分の自我とそれが生んだもののみという圧倒的主観重視の考え方。本文では、言語の取得には他者はいらず、自己完結なのだ、との考え方で登場

吝嗇＝りんしょく↓けち／吝嗇家↓けちん坊・守銭奴（しゅせんど）・しみったれ・吝ん坊（しわんぼう）

cf 英国の文豪チャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』に出てくるスクルージは、ケチの典型で〝スクルージ＝ケチ〟として一般名詞化しているほど／フランスの喜劇作家モリエールの作品にも『守銭奴』があります。現代日本でも笑えて楽しめる作品ですよ

爪に火を点す↓ろうそくのかわりに爪を使うほど、節約倹約

下女＝げじょ↓炊事や雑用のための下働きに召し使われた女性

異数＝いすう↓特別扱い・この場合の「数」は等級をあらわす

年歯（年端）の行かない＝としはのいかない↓幼い

歓心を得る＝かんしんをえる↓機嫌を取る

恐縮＝きょうしゅく↓申しわけなく思い、恐れ入ること

冷遇＝れいぐう↓冷たい扱い

増長＝ぞうちょう↓高慢になる・つけあがる・えらそう

自縄自縛＝じじょうじばく↓自らの言動によって自らの身動きがとれなくなること　関連語　自業自得

復習問題　第一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）はじめてことばをカク得する　①確　②革　③穫　④獲　⑤拡

（イ）その発想は極めて独ガ論的だ　①賀　②我　③蛾　④雅　⑤牙

（ウ）カン察から自然の探求が始まる　①観　②勘　③感　④寛　⑤官

（エ）愛情自体の発ゲンとはいかない　①言　②現　③元　④源　⑤眩

（オ）心と身体をソク縛している　①則　②即　③側　④束　⑤捉

次の語句の意味として最も適当なものを、次の選択肢から選びなさい。

（カ）爪に火を点す
①余念なく集中する　②自虐的である　③質素倹約に努める
④細かく気を配る　⑤手先が器用である

（キ）年歯の行かない
①気の利いたことをいえない　②まだ幼い　③ものごころついた
④社会性の目覚めない　⑤無駄に年を重ねる

（ク）歓心を得る
①気に入られようとする　②強い興味をひく　③ほめたたえられる
④相手を思いやる　⑤冷淡さを隠す

テキスト解答・解説

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り** ……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2 **同一性分断の誤り** ……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け**失敗。**同質性分断**ともいう。

3 **正しい対比喪失の誤り** ……本文中で「**A⟷B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C⟷D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善⟷悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断** ……本文中の記述がないのに、「**すべての〇〇は**」「**あらゆる〇〇は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断** ……本文中の記述がないのに、「**〇〇のみ**」「**〇〇だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**（わいしょう）があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断** （不当な当為（とうい）判断）……本文では「〇〇である」「〇〇だ」という事実判断をしているのに、「**〇〇であるべきだ**」「**〇〇にしなければならない**」「**〇〇する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7　**部分的指摘の誤り**　……本文中では、**「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8　**記述に反する誤り**　……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9　**記述なし**　……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1〜8・10〜12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10　**文脈喪失の誤り**　……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11　**物理的スリカエの誤り**　……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢**。小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12　**比喩を文字通りに解釈した誤り**　……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝(ひざ)がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

第一講　入試現代文の導入　その１《評論》

《本文の対比構造》

主役＝筆者のことば観

ことばのもつ対話性を第一次的に考える
他者とのかかわりの場
ことばが私たちの生活世界において
働くその様をありのままに見る

主な対比

敵役＝〈語―文法〉的ことば観

ことばが語と文法からなる
ことばのもつ対話性を二次的に
考える・独我論的
ことばを道具として獲得
対話はことば獲得の結果

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

文章というものは、もれなく対比・比較で書かれています。今回の文章は、ことばをテーマとした〝言語論〟ですが、二つの立場の見解が戦わせられています。すなわち、〝筆者が主張したい方〟と〝比較・敵役の主張〟です。では、設問の「このことば観」はどっちなのか考えて文章を読み、その後、選択肢を吟味することになります。はい、この傍線の「ことば観」は敵役です。筆者が第一に考えるべきと見なす「対話性」や「ことばが私たちの生活世界において働くその様」を、「ありのままに見ることはできない」というダメな考え方のほうです。言い換えれば、他者なんていなくても、単語と文法さえ覚えれば、ことばは一人でもマスターできるぜ、という考え方です。筆者は、これを「独我論的」と批判しています。漢字の字形通りの意味です。さらに〝ドクガ〟という語感、響き、いかにも悪そうですね。〝毒牙〟〝毒蛾〟さえ連想します。〝ドクガロン〟て怪獣いそうです（そういうダークサイドっぽいほうが好きという人もいるでしょうけどね）。こんなふうに筆者の主張ではないほうを問うてくることもあるのです。設問のすべてが筆者の主張を問うているとは限らないのです。このこと自体、よく知っておいてね。

では、選択肢を吟味します。①は「ことばは他者との対話から生まれ」が×です。後半の「〈語―文法〉的に運用」は敵役としてOKですが、前半は筆者の見解です。こうして選択肢のなかで、筆者の見解と敵役見解を同じもののように混ぜてしまう間違い、あるいはそもそも敵役を答えてほしいのに主役メッセージを答えてしまうなど、これらを対比混乱の誤りと呼んでいます。動画授業では、カラーリングしてますよね。本文の正しい理解のために色を分けたのに、それをごちゃ混ぜにしている間違いです。〝間違いの王様〟です。②は、「ことばは道具として獲得され」は敵役としてOKですが、後半の「他者との関係の場で機能している」が筆者側ですから、×。これも名付けて対比混乱の誤りです。③は、「ことばを生活世界とのかかわりで運用し」が筆者側ですから×。後半の「対話性への視点を欠落させている」のみ敵役。これまた混ぜ混ぜの対比混乱の誤りです。④は、「ことばを〈語―文法〉的にとらえ」が敵役でよし、ですが、「他者との対話性を模索」が筆者側で×。対比混乱の誤りです。もはやしらじらしー！と叫びそうです。そうです、わかってくると誤りの選択肢のほとんどがしらじらしいのです。こうした解法をマスターして、試験会場で「しらじらしー！」と叫べるようになりましょう（だまって静かに解答しなさいと、試験監督に注意されますけど）。正解は⑤です。筆者が大事だと考えるものをことごとく欠落させたものとして、見事に敵役の説明になっています。

第一講　入試現代文の導入　その２《小説》

《本文の対比構造》

主人公「健三」

身体の束縛 ＋ 心の束縛
島田夫婦の専有物
島田夫婦から離反

主な対比

敵役＝島田夫婦

《もらい子、健三への対し方》

押しつけがましい愛情
愛情そのものの発現ではない

小さな対比

《普段の行動》

吝嗇・爪に火を点す
下女に味噌汁をよそってやる
飯櫃やお菜のはいっている戸棚に錠

《解説》

小説もまた、もれなく対比・比較で書かれています。主人公＝健三（養子に出された経験のある夏目漱石自身でもあるようです）と健三をもらいうけた島田夫婦との対比です。島田夫婦が敵役です。ただしこの夫婦には二面性があります。普段は、非常にケチケチなのに、もらい子健三にはどんどんものを与えるという二面性で、小さな対比となっています。文章を読むときに、ただ一生懸命に読むとかストーリー展開に気を使うのではなく、何と何を比べているのかに注意を向けましょう。とたんに文章がクリアに読め、筆者がどんなメッセージを伝えたかったのかクリアになり、設問もクリアに答えられるようになります。小説問題で出題者が求めていることは、みなさんの独創的な文学鑑賞の能力ではないし、みなさんがもっている心理的に豊かな感受性でもありません（そのようなものは、マーク・シート形式で審査できませんし、模範解答もありません）。書いてあるままの現代日本語の試験です。〝書いてあるまま〟といっても対比で書いてあるから、そこの区別ができているかと問うてきます。いいですか、小説問題には読み方があるし、解き方があるんですよ。

問１《傍線部説明・選択肢》

さて、問１は島田夫婦の二面性の内、普段の生活ぶり、ケチぶりについての説明を求めています。「健三に対する夫婦は金の点に掛けてむしろ不思議なくらい寛大」なのに、普段は「吝嗇」です。「爪に火を点す」とも書かれています。この流れの中に「下女に味噌汁をよそってやる」行動も位置づけられるのです。それで健三の実家の人たちは「苦笑」しているのです。やれやれ、やりすぎだよね、といった感じで。したがって⑤が正解です。「その量を惜しんで」がグッド。金惜しみ、物惜しみ、そのケチぶりが表現されています。②の「主人の妻〜恐縮」、④の「主人の妻という身分〜下女」は、ともに身分の上下という無関係なものを対比・比較させています。本文の正しい対比をわざと見失っている間違いです。いいですか、出題者は意図的にこういうスレチガイの間違いをつくっているのですからね。こっちもそういう目で選択肢を見る習慣をつけましょう。名付けて正しい対比喪失の誤りです。①は「実家のものの前で、これ見よがしに」が×です。健三が「実家に帰ってから後」の「評」ですから、目の前で実演アピールしたわけではありません。記述に反する誤りです。そもそも何をアピールするというのでしょう。〝これが正しい味噌汁のよそいかた講習会〟でしょうかね。〝下女以上の働き者〟アピールでしょうかね。いずれにせよ〝これ見よが

し↔ひっそり〟は比べられていません。これも正しい対比喪失の誤りです。③は「苦笑」の相手・対象が違います。本来は島田夫婦のケチぶりへの苦笑のはずが、「健三がほとんど無関心な態度を示したから」になっています。困っている女性に手を差し伸べる紳士たれ、という家訓でもあるんですかね。記述に反する間違いです。

問２はカット

問３《傍線部説明・選択肢》

愛情そのものの現れと言えない、島田夫婦の強引な親切ぶりは当然のように健三君の反発や心の離反を招きます。これが傍線の「彼らは自然ために彼らの不純を罰せられた」です。①はまず、「健三を愛するのは、義理の親とはいえ当然」が×です。「自然＝当然」は、正しくは夫婦が罰せられた（健三の心が離れて行くこと）にかかるはずです。それが〝子を愛するのは当然〟のような用い方をしてしまいました。本文の記述と違う、記述に反する誤りです。また「甘やかしすぎ」も×です。強引な愛情表現ですからね。記述に反する誤りです。さらに「健三のわがままを増長」も×ですね。健三のキャラクター設定もおかしくなってます。健三は〝自分勝手〟キャラではありません。素直なこどもとして描かれています。ゆえにある程度まで、夫婦の言いなりになりますし、度が過ぎる夫婦の〝親切の押し売り〟に当然のように反発を覚えるのです。ことごとく記述に反します。こんなふうに、もともと本文での〝キャラクター設定〟はどうなっているのか意識することは、小説問題を解答するときには大切な習慣ですよ。②の「健三には小さな赤い門のある家の懐かしい思い出があって、島田夫婦の心からの愛情もただ煩わしい」という表現では、「小さな赤い門」と「島田夫婦」の言動が対比扱いですが、実際には「小さな赤い門」は夫婦に言わされているものです。授業のカラーリングでも「島田夫婦」と「小さな赤い門」は同じ青の分類です。これを違うものであるかのように、対比であるかのように表現しては間違いです。こういうのを同一性分断の誤りと呼んでいます。さらに「心からの愛情」は笑っちゃうほどのしらじらしさですね。記述に反する誤りです。④は、どうでしょう。島田夫婦が「自縄自縛に陥った」が、もう感動的なくらいの見事な間違いです。間違いに感動するのはどうかと思いますが、これぞ選択肢問題の〝間違いの王様〟、そうです、対比混乱の誤りなのです。縛られている、「束縛」されているのは健三君です！　なにげなく読んで解答していると、この④を

答えに選んでしまいそうです。しかし「縛」は健三について書かれていることで（カラーリングでは赤）で、島田夫婦の不純さ側キーワードではない。したがって島田夫婦の「自縄自縛」とやってしまうのは、なんという仕組まれた対比混乱か！　こういう選択肢を自信をもって×とできるようになるために、この現代文講座があるといってもいいくらいです。⑤はどうか。まず「子供を育てた経験が十分ではなかった」が本文中に根拠のないものです。記述なしです。さらに「慎重になりすぎて」も×です。記述なしと言ってもよいですが、夫婦は「強引」なわけだから「慎重」は、記述に反すると言えます。はい、正解は③です。

模範解答

その１　問１＝⑤

その２　問１＝⑤　問３＝③

復習問題解答

復習問題　解答　第一講

（ア）④　（イ）②　（ウ）①　（エ）②　（オ）④
（カ）③　（キ）②　（ク）①

解答漢字一覧

（ア）獲得　（イ）独我論的　（ウ）観察　（エ）発現　（オ）束縛